

FARM
TOKYO FESTIVAL

東京芸術祭 2021
ファーム

Asian Performing Arts Camp

最終公開
プレゼンテーション

Final Presentation

10/30 SAT
13:00-18:00(JST)
オンライン Online



目次

東京芸術祭ファームディレクター ごあいさつ	
東京芸術祭ファーム2021 Asian Performing Arts Camp 概要	p.2
東京芸術祭ファーム2021 Asian Performing Arts Camp プロセス	p.3
最終公開プレゼンテーション タイムテーブル	p.4
プレゼンテーション リサーチノート	p.5
ファシリテーターの対話 -トランスフィールドな世界に寄せて-	p.9
ゲストフィードバックer プロフィール	
スタッフ クレジット	p.11

東京芸術祭ファームディレクター ごあいさつ

昨年に続き2度目となったオンラインによるアートキャンププログラムですが、この一年でオンラインネットワークはシステムも使う側もさらなる進化を遂げ、単なる情報交換から時間の共有、体験の共有すら可能になりつつあります。もちろんリアルな体験とは別次元のものです。オンライン空間とはリアルとバーチャルをつなぐのではなくリアルとリアルの間であり、オンラインでのやりとりがリアルな生活に影響を及ぼすことができる、それはこれまでインターナショナルな場に集まり、そこでの体験がローカルでの活動に影響を与えていたのと同じ構造で、むしろ移動を伴わずローカルにしながらトランスカルチャーを体験できるチャンネルになりつつあります。もはやオンラインはリアルの劣化版ではなく、リアルにはできない交換や協働を可能にしていく。昨年はその可能性を感じましたが今年はいよいよその実証、画面の向こう側にあるリアルとの接続を期待しています。最終プレゼンテーションは参加者のリサーチを観客と共有する場ですが、いわゆる受け手としての観客ではなく、観客それぞれがそれぞれのフィールドでの新たな視点を得られる体験の場であってほしいと願っています。そして観客からのフィードバックにより参加者にも新たな視点、可能性をもたらす、相互に影響し合うリアルな関係が生まれることを願っています。

多田淳之介（ただ・じゅんのすけ）



Photo by 平岩享

1976年生まれ。演出家。東京デスロック主宰。古典から現代戯曲、ダンス、パフォーマンス作品まで現代社会の当事者性をフォーカスしアクチュアルに作品を立ち上げる。子どもや演劇を専門としない人とのワークショップや創作、韓国、東南アジアとの海外コラボレーションなど、演劇の協働力を基にボーダーレスに活動する。2010年より富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督に公立劇場演劇部門の芸術監督として国内歴代最年少で就任、2019年3月まで3期9年務める。2014年「가모메 칼메기」が韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。2019年東アジア文化都市 2019 豊島舞台芸術部門事業ディレクター。青年団演出部。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。

東京芸術祭ファーム2021 Asian Performing Arts Camp

約2ヶ月にわたるオンラインでのアートキャンプを経た、アジア各地のつくり手たち8人のプレゼンテーション

「Asian Performing Arts Camp」は、アジア各地で活動する若手の舞台芸術の人材が、今後の自身の活動やフィールドを耕していくためのアートキャンプです。それぞれの問題意識やテーマを持ち寄り、文化や国籍を超えたディスカッションを通じてリサーチプロセスを共有しつつ、新たな価値観を育むことを目指しています。

この最終公開プレゼンテーションでは、参加者それぞれが期間中に取り組んだリサーチの結果を一般公開で発表し、ゲストフィードバックを迎えてのフィードバックセッションを行います。参加者にとっては、様々な視点でのフィードバックをもらうことで、リサーチやアイデアをさらに発展させるきっかけとなると同時に、それらをローカルな場に持ち帰り、各自のフィールドで次の一歩を踏み出すための機会でもあります。

オーディエンスもフィードバックのひとりです。オンラインホワイトボードツールMiroを使用し、オーディエンスのみなさまからも、それぞれのプレゼンテーションにフィードバックやコメントをしていただくことができます。Zoomでのセッション終了後にはSpatialChatにて交流会もおこないますので、プレゼンテーション発表者との交流の機会として、ぜひご参加ください。

東京芸術祭ファーム2021

Asian Performing Arts Camp プロセス

5月～6月

Asian Performing Arts Camp参加者募集、オンライン説明会

5月末から6月下旬にかけて、アジアを拠点に活動する演出家、振付家、劇作家、ドラマトウルク、プロデューサー等、舞台芸術の企画において重要な役割を果たす35歳以下の作り手を対象に公募を行いました。6月9日にはオンラインでの説明会も実施しました。

7月中旬

選考—8名の参加者が決定

9か国48名の応募があり、書類審査による一次選考、面接による二次選考を経て、8名の参加者が選出されました。

8月～9月

キックオフ—活動前半

前半はまず、8月25日にキックオフを迎え、その後毎週1回、Wander Trekking (WT) と称してオンラインセッションを重ねました。WTでは、参加者からそれぞれの進行中のリサーチの内容をシェアしてもらうほか、ディスカッションやワークショップなどを行いました。また、9月15日には詩人でNPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)代表理事の上田假奈代氏によるレクチャーとワークショップも行いました。上田氏が行っている「ココルーム」の活動、及び大阪・釜ヶ崎の背景についてシェアしていただいたのち、ペアになってインタビューを行い、その内容を元に詩を創作するワークを行いました。WT終了後には、ほぼ毎回Bonfire と称して交流会を実施。Campメンバーのみならず、芸術祭ファームの他のプログラム参加者も交えての交流会を行うこともありました。

中間プレゼンテーション

9月29日に中間プレゼンテーションを実施。ここまでの活動成果のアウトプットを行うとともに、オンラインでの発表方法を探求する機会となりました。中間プレゼンテーションについては、「Asian Performing Arts Camp レポート(前編) 8名のリサーチ経過をかいまみる「中間プレゼンテーション」」(https://tokyo-festival.jp/2021/openfarm_4)でもお読みいただけます。

10月

活動後半

10月からはいよいよ後半に突入。10月12～14日のコア期間を含め、週2回程度のWTを行い、リサーチを煮詰め、参加者それぞれのテーマの共通点も探っていました。10月12日には山口情報芸術センター[YCAM]キュレーターのリオンハルト・バルトロメウス氏による、「ALSO SPACE, ALSO ART — パンデミック下におけるアートのあり方とは？」と題した公開レクチャーを実施しました。

最終公開プレゼンテーション

以上の約2か月にわたるAsian Performing Arts Campの期間中、参加者は持ち寄った問題意識やリサーチテーマに対して、インプットとアウトプットを繰り返してきました。期間中はファシリテーター2名(JK アニコチェ、山口恵子)が参加者に伴走し、国や文化を超えた協働の可能性を共に探求。本日の最終公開プレゼンテーションでは、レクチャーを担当していただいた上田假奈代氏に加え、キュレーターのヘリー・ミナルティ氏(LINGKARAN | koreografi)をゲストフィードバックに迎え、参加者それぞれが、ここまでのプロセスを経たリサーチ結果を発表します。

これまでのプロセスは「OPEN FARM」(<https://tokyo-festival.jp/2021/archive/>)でも発信しております。

Asian Performing Arts Campでは、オンラインホワイトボードツールのMiroを使用し、テキスト、ビジュアル、動画も交えて参加者のリサーチのプロセスを記録してきました。ここを「キャンプ」の拠点(Base camp)として、参加者それぞれが自らのテーマの探索を行いました。下記リンクより、そのリサーチプロセスの一端がご覧いただけます。

Base Camp (<https://miro.com/app/board/o9Jl2cFdgo=>)

最終公開プレゼンテーション タイムテーブル

使用言語:英語 (日本語通訳・翻訳あり)

※タイムテーブルは予定です。前後する可能性があります。

Zoom

12:50 Door open 開場

13:00 Introduction インTRODクシヨン

13:10 Presentation プレゼンテーション

●モデレーター

Asian Performing Arts Camp ファシリテーター



JK アニコチェ
バギオ (フィリピン)



Photo: Kōchiro Kajima
山口恵子
京都 (日本)

▷参加者たちは、各自の関心に基づいて三つのグループに分かれています。これらのグループを、キャンプの周りに形成される集まりのイメージに重ね合わせて、「Bonfire (たき火)」と呼んでいます。

Bonfire 1

▷Bonfire 1 は、3名が合同で発表を行います。残りの6名は、それぞれ個別に発表を行います。

「シラチャー・ソース」

※右記3名がチームとして
プレゼンテーションを実施

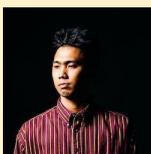


Photo: Hsieh Chen Han
アルバート・ガルシア
台北 (台湾) / マカオ



草薙樹樹
東京 (日本)



Photo: Hsuan-Lang Lin
王顥燁 (ワン・ハオイェー)
彰化 (台湾) / ベルリン (ドイツ)

13:40 Break time 休憩

13:50 Bonfire 2



Photo: Erya Ruswandono
エカ・ワヒュニ
ジョグジャカルタ (インドネシア)

「私の場所」



Photo: Hsieh Chen Han
アルバート・ガルシア
台北 (台湾) / マカオ

「オンラインが私の 故郷なのかも」



Photo: Gio Potes
セリーナ・マグリュー
マニラ (フィリピン)

「RAMPAGE (ランページ): 抵抗としての クロスオーバー」

14:35 Break time 休憩

14:45 Bonfire 3



洪小婷 (アン・シャオティン)
シンガポール

「ライフサイクル ・アセスメント 魚たちの間にある 生来の不平等につ いて 1.0」



ワリッド・アリ
クチン (マレーシア)

「魚の物語」



Photo: Hideki Kurita
菊地もなみ
東京 / 千葉 / 山形 (日本)

「土地と人間の あいだにある もの」

15:30 Break time 休憩

15:35 Feedback session フィードバックセッション

●ゲストフィードバック



ヘリー・ミナルティ
— キュレーター / LINGKARAN | koreografi
ジョグジャカルタ (インドネシア)



上田假奈代
— 詩人 / NPO法人こえとことばとこころの部
屋 (ココローム) 代表理事 / 堺アーツカウン
シルプログラムディレクター
大阪 (日本)

Spatial
Chat

17:00 Socializing session 交流会

▷SpatialChatを使用した交流会を実施します。
プレゼンテーション発表者との交流の機会として、
ぜひご参加ください。

18:00 終了予定

「シラチャー・ソース」

プレゼンテーション発表者（制作と上演）：アルバート・ガルシア、草薙樹樹、王顥燁（ワン・ハオイェー）

ゲスト：山田カイル

Zoomを協働、共有、そして、コミュニティの場として捉える。同時に、今日のパンデミックとこの場の関連を考え、オンラインにおいてどのようなモビリティがありえるかも検討していく。ワンダートレッキングという冒険を通して得た様々な手法を使って、マカオと台北を拠点にする私、王顥燁（ワン・ハオイェー）（台湾/ドイツ）、草薙樹樹（日本）の3人によるグループでは、「私たち」と「他者」のあいだにどのような観客性質があり得るかを探っていく。また、同じ空間を共有する移住者として、私たちの間にどのような共通点があるかを探り、私たち作家がどのようにつながり、コレクティブとしてパフォーマンスを想像し直し得るのか、その可能性を問う。



Photo: Hsieh Chen Han

アルバート・ガルシア - 台北（台湾）/マカオ

1994年生まれ。マカオでフィリピン系の家庭に育つ。世界的に活躍するダンサー、パフォーマンス作家。身体を媒体として、マカオという土地を別の側面から見ることで生じるアイデンティティの思考を表現し問い直す。アジアやヨーロッパの多数のアーティストとパフォーマンスやビジュアルアートなど様々なジャンルでコラボレーションを行う。ダンス（特に中国舞踊）と振り付けに出会うきっかけとなった詩篇舞集 Stella & Artist（マカオ）とは現在も密接に関係し活動している。

私は、オンラインにおける創作のプロセスとコラボレーション、そして、インターネット上のコミュニティで共有されるパフォーマンスの制作についてリサーチを行ってきました。

オンラインコミュニティはどこに存在するのでしょうか？ 既存の力関係や社会構造はオンラインコミュニティにおいてどのような意味を持つのでしょうか？ オンラインコミュニティは実際の身体的な世界よりも、私たちに繋がりを実感させてくれるのでしょうか？ 地理的にどこにもなく、物理的な存在も持たないような空間という概念の中で、私たちはどのように共同体の感覚を育むことができるのでしょうか？

それぞれ多様な文化的背景を持つアルバート、ハオイェー、樹樹の3人は、それぞれの出身地や現在の居住地とは必ずしも結びつかない（アイデンティティと帰属意識）をテーマに、互いに共通する経験や興味を見出し追求してきました。このオンラインのパフォーマンスを通じて、3人は繋がりを、あるいは一体感や帰属意識を求め、観客を含めたオンラインのコミュニティにおいて、時間と空間を共有することを目指します。



草薙樹樹 - 東京（日本）

身体感覚を追求する表現家。ディレクター、パフォーマンスアーティスト、振付師、ウェルネスインストラクター、映像作家として、多角的な表現技法や伝達方法を探求。ダンス・パフォーマンスアートの制作、体験型・参加型展覧会、国際映画祭での映像作品上映・審査員を務めるほか、ワークショップやアーティストトークを世界各地で行う。Kusanagi Sisters ディレクター。

私たちは、ポピュラー文化や日用品を使って、文化的アイデンティティの流動性が、新たなオンラインコミュニティの形成とどのように結びついているかを探る。複数のカメラを通じて、観客は、他人の人生の、とある瞬間を覗きみることができる。また、異なる地域性やリアリティの境界線を、カメラが生み出すイリュージョンによって曖昧にすることも試みる。このパフォーマンスは、キャンプで出会ったアルバート・ガルシア（マカオ/台北）、王顥燁（ワン・ハオイェー）（台湾/ドイツ）、草薙樹樹（日本）の初のコラボレーションである。新たな鑑賞法やオンラインパフォーマンスの新たな形式を探っていくなかで、グローバリゼーションや西洋中心主義から受け継がれる力関係も問うこととなった。たとえば、シラチャー・ソースは今ではあらゆるアジア料理を出すレストランで広く使われているが、元々はベトナムからきた中国系移民によってカリフォルニアで作られたものであることを、私たちが忘れてしまったように。



Photo: Hsuan-Lang Lin

王顥燁（ワン・ハオイェー） - 彰化（台湾）/ベルリン（ドイツ）

1988年生まれ。台湾出身のアーティスト、パフォーマンス作家。現在は台湾とベルリンを拠点に、ソーシャリー・エンゲイジド、インターディシプリナリー、デジタル・パフォーマンスを中心とした活動を行う。コラボレーションによる制作が多く、そのなかで演出、執筆、リサーチ、パフォーマンスなどを行う。これまでに台北で商業ベースの舞台2作品と小劇場2作品を演出。作品はこれまでロンドンと台北で発表。現在、台湾の財団法人国家文化芸術基金会から資金提供を受け、ダンスの短編映画を制作している。

「私の場所」

プレゼンテーション発表者：エカ・ワヒュニ

Asian Performing Arts Campの期間中、インドネシア、ジョグジャカルタのパジャンガン村にて、ムダ・メナム（植える若者たち）という団体と、ケロムポック・ワニタ・タニ（女性農業協会）の所属者を対象に、村の女性たちについて調査を行いました。その中で、村の女性たちは、物理的空間とデジタル空間が重なりあう新しい空間を非常に重視している事が分かりました。彼女たちは毎日、このデジタル空間上のコンテンツを消費しています。ですが、彼女たちはそのデジタル空間を、画面に映る単なる像として、あるいは日常的なテクノロジー消費の最新版として捉えているだけでなく、自分たちの現実世界の一部と考え、仮想空間上の像を実際の生身の空間に取り入れようとしています。今回の最終プレゼンテーションを通して、リサーチで発見したことを共有し、この新しい空間が彼女たちの(あるいは私たちの?)意思決定にどのように影響を与えているか、考えたいと思います。



Photo: Ersya Ruswandono

エカ・ワヒュニ - ジョグジャカルタ（インドネシア）

1989年生まれ。振付家。文化や社会に深い関心を持つ。Paradance、Imajitari、Indonesian Dance Festival 2020、Helatari Salihara 2021などの様々なフェスティバルで作品を発表。振付家としてだけでなく、LINGKARAN | koreografiのボランティアや、dokumenTARIの編集者としても活躍。友人と一緒にPortalekaやTepian Collectiveを立ち上げ、ディスカッションやパフォーマンスを通してアートについての知的思考を重ねる。

「オンラインが私の故郷なのかも」

プレゼンテーション発表者：アルバート・ガルシア

ゲスト：セリーナ・マギリュー

私は、当初行っていた“土地、領域、そして身体”というテーマについてのリサーチを元に、今回のアートキャンプ自体を“領域”として考察しながら、オンラインでコミュニティを持つという感覚を再構築してきました。キャンプの活動の中で、他のキャンプメンバーであるシャオティンがシンガポールの“年々有魚”という魚をめぐる文化について語ってくれたこと、ハオイェーが選んだ台湾音楽、そしてセリーナが使うタグリッシュ(タガログ語/フィリピン語、英語の混成語)など、子どものころに触れた文化と再会できたことで、とても懐かしく感じ、自分の故郷を思い出しました。また、今回の活動は、中国人であり、台湾人であり、フィリピン人でもある自分の生い立ちについて問い直す機会でもありました。

最終プレゼンテーションでは、同じカババヤン(フィリピン人同胞、同国人、地元仲間)であるセリーナを招いて、自分のフィリピン人らしさを解き明かしてみたいと思います。

その実践の交流を通して、2人のカババヤンについて何が明らかになるでしょうか？

2人が邂逅する場所とは？

どうやったら私はフィリピン人になることを学べるでしょうか。

私は十分にフィリピン人らしいでしょうか？



Photo: Hsieh Chen Han

アルバート・ガルシア - 台北（台湾）/マカオ

※P5参照

「RAMPAGE(ランページ): 抵抗としてのクロスオーバー」

プレゼンテーション発表者：セリーナ・マギリュー

フィリピンではクィアアクティビストは“ルマランパ”である、つまり国全体を巻き込んでの革命を起こすために“ランパ”している*人である、と考えます。このプレゼンテーションでは、(リサーチとしての)パフォーマンスを通して、クィアな空間(つまり、制度、場所、イベント、組織、そして時には歴史そのものなど、LGBTQIA++コミュニティがその可視化のために“ランパ”し、戦ってきたような場)について理解を深めていきます。二元的なジェンダー構造のシステムに異議を唱え、根本的な挑戦を突きつける言説空間としてのトランス身体において、ジェンダー、セクシュアリティ、そして闘争性の交差がどのように表現されるかを考察することで、アクティビズムにおいて、異性愛規範的な男らしさ/女らしさのイメージがどのように機能しているかを検証します。“ランパ”は、進歩的に前進する姿勢をみせることで、多様な身体を持った人々を招き入れ、行動を起こし抵抗しようと呼び掛けます。

そして、異性愛規範を必要条件とせず自らの居場所を求めて葛藤する「新しい男性」を提示することで、生物学的性、ジェンダー、セクシュアリティの複雑な関係性とアイデンティティの関係性を認知したいと考えています。

*Rampa(ランパ): [名詞] (段差や隙間にかける) 橋わたし、[動詞] 歩く、気取って歩く、行進する



Photo: Gio Potes

セリーナ・マギリュー - マニラ (フィリピン)

1998年生まれ。トランス・アーティスト。現在はマニラを拠点とする。フィリピン工科大学でフィリピン学を専攻し、フィリピン文学におけるトランスジェンダーのナラティブを研究した「TransPanitik」というテーマで卒業論文を提出。また、Concerned Artists of the Philippines、PUP Sining-Lahi Polyrepertory、Alyansa ng mga Panulat na Sumusuong、Sticky Rice Karavanといった文化的・革新的な団体で、舞台・映画俳優、パフォーマンス・アーティスト、アクティビストとして活動。

「ライフサイクル・アセスメント 魚たちの間にある生来の不平等について 1.0」

プレゼンテーション発表者：洪小婷 (アン・シャオティン)

カメオ出演：菊地もなみ、フリッド・アリ

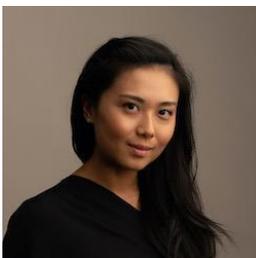
アジアで「エコ・シアター」に従事するアーティストとして、そして物語の収集者として、私は「食」に執着と言って良い、強い関心を持っている。

特に、魚をはじめとする島々の食生活に関心があり、今回はそのなかでも、ポカポカ陽気のシンガポールに暮らす私たちがよく口にする、とある魚に注目したい。

映像、コラボレーティブなデジタルシアター、音響デザイン、フィールドワークといった手法を用いて創作される《ライフサイクル・アセスメント 魚たちの間にある生来の不平等について 1.0》はオンラインで行われる「レクチャーパフォーマンス」の新しい形を模索する試みである。デジタル媒体の利用が可能にする没入性により、観客に参加してもらい、その知恵を共有してもらおう事がより簡単になった場の生成を目指す。この実験において、観客は、答えよりも問いを多く引き起こすような思索的な物語に参加することで、人間の営みが引き起こす環境問題に対する一般的な想定を揺さぶられる事になるだろう。

自分たちが口にする食べ物がどこから来ているのかを知ることによって、様々な地域に暮らす私たちの間には、自分たちが思っているよりも多くの共通点があるということを発見できるのではないだろうか。

(注意：道中、船酔いをするかもしれません。)



洪小婷 (アン・シャオティン) - シンガポール

1993年生まれ。パフォーマンス作家、俳優、ドラマトゥルクであり、インターディシプリナリーなコラボレーションも行う。彼女の創作活動は、芸術と社会の美的ではない側面との交差点にあり、社会のイノベーションと変化を掲げる。現在は、「Recess Time」や「Poppy」などのEco-Theatreプロジェクトに注力。また、実践劇場(シンガポール)の提携アーティストであり、Practice Tuckshopのプログラム企画者でもある。イギリスのLancaster Institute for Contemporary Arts (LICA)を卒業し、LICA賞(演劇部門優等賞)を受賞。

「魚の物語」

プレゼンテーション発表者：ワリッド・アリ

このパフォーマンスでは、様々な国や地域で人々がどのように水と関わり、どのように魚を理解しているかについて考えていく。この上演は、「水と音」、「テキスト性とスタッカート」、「魚の隠喩について」、の三部構成になっている。構成は、リハーサルを通して一番うまくいくものに変更する可能性がある。核となるのは、世界のさまざまな文化において、水と魚について、どういった共通の考え方が見られるか、探ることである。魚の種類や、輸入された魚がどのように生態系を変えたか、（あるいは民話を通して）考える。魚と水の特徴に目を向け、演劇的なものにしていく。

「水と音」では、水の様々な質感が作る音とはどのようなものなのかを探る。例えば、ポタポタと落ちる水、滝のような流れ、冷たい水など。

「テキスト性とスタッカート」はテキストの発話によるパフォーマンスになる予定。今日のテクノロジーを通じた話し言葉の演じ方、その特質と視覚を扱う。

「魚の隠喩について」では、ある魚の姿かたちや特徴への思考をより深く掘り下げる。いつも寂しそうな魚、いつも嬉しそうな魚、いつも怒っているように見える魚。そう見えるのは、なぜか。

演目の一部で二人のパフォーマーが出演する。



ワリッド・アリ -クチン（マレーシア）

1989年生まれ。コンテンポラリー・パフォーマンス原案者、パフォーマー、デザイナー。マレーシアの現代演劇グループ、Luar Kotak Productionのクリエイティブ・ディレクター。日常生活の中から多くの題材を得て、様々なアプローチで作品化する。2008年以降、多くの著名なアーティストと活動。パフォーマンス分野だけでなく、Selut PressやPeanutzinなどの出版メディアで作家としても活躍。

「土地と人間のあいだにあるもの」

プレゼンテーション発表者：菊地もなみ

このキャンプを通してメンバーたちと交流するなかで、私たちには多くの共通点があり、また多くの異なる点にも気づくことができました。

言語、速度、環境、音、問題、変化、芸能や習慣、受け継がれてきたもの。

そこにある要素ひとつひとつが、私たちの身体に影響し、また私たち自身もその要素の一部です。

今一度、自分のまわりにある要素に繊細になってみたい。

私たちが何気なく過ごしているこの暮らしの中にある要素を、もう一度、見つめ直してみたい。

そこにある音や光、質感、匂い、温度、味、触感

様々な要素を拾い、再構築することで

私たちは

もう一度、新しく出会うことができるだろうか。

それは、見えているようで見えていなかったものに

もう一度出会うこと。

そこで呼吸している自分に気づくこと

そこに存在する自分に気づくこと

大鳥をどこに感じるだろう

雪解けの水、炎と影、冬の風

この集落もまた、変化の中にある

古くから受け継がれてきたものもまた、失われつつある

この土地と人のあるものとは、なんだろう。

それはまた、遠く離れた友人たちのなかに、違う形であるのだろうか



Photo: Hideki Kurita

菊地もなみ -東京/千葉/山形（日本）

1992年生まれ。俳優、パフォーマー。土地と身体の関係性にフォーカスした創作を行う。早稲田大学文化構想学部卒業。在学中から、俳優として舞台や映像作品に出演。卒業後、劇場の演出部を経て、様々な表現分野の交差する場として「HANAICHI」を立ち上げる。各地の風土や暮らしから生まれる表現を探究し、国内外でのフィールドワークを重ねている。

ファシリテーターの対話

—トランスフィールドな世界に寄せて—

2021年10月13日、Zoomにて（原文は英語）
（恵子は京都、JKはバギオにて）

「コミュニティ」と「アーティスト」

恵子：私は、これまで皆で話してきたことのなかで、「コミュニティ」と「アーティスト」という言葉が凄く頭に残ってる。それぞれ、すごく違った意味を、この2つの言葉には見出していると思う。この言葉について話すのはどう？ もちろん、この2語に収まりきるようなプログラムじゃないけれど。

JK：そうだね。このプログラムは、新しいコミュニティを生み出し、それを自分が暮らす場所と接続しながら、アーティストであるとは、という事について考えられる機会だと思う。

恵子：パンデミックの中で、コミュニティであったり、他者と繋がりたいという気持ちを皆持っていると思う。パンデミックがあって、皆、社会との繋がりの持ち方が変わったかもしれない。

JK：今って多分、人間として、市民として、あるいはお互いの「コラボレーター」として、オンラインでもリアルでも、どうやってコミュニティを作ってつながるかという事を学び直したり、学びほぐしたりしている時期なんだろうと思う。パンデミック下でどうやって互いに関われば良いのかなんてことを—それはデジタル上で、という事でもそうだし、もっと広く、文化を越えて、という意味でも—その方法や決まりをハッキリと書き記した人なんて、まだ誰も居ないんだよね。だから私が常に問うようにしているのは「私たちはどこで、いつ、どうやって互いに出会い、共にいる事ができるだろうか？」ということ。

恵子：すごく大きいスケールでも小さいスケールでも、このパンデミックによって私たちはお互い、国ごとに切り離されていて。世界は完全に変わってしまった。今の状況は過去の行いの結果なんだけれど、かつての繋がりが壊れてしまったから、以前とは違った方法で現実社会と接続する必要があると思う。

オンラインと（いう）場所、時間と空間の共有

JK：キャンプを通して、どんな「アハ！体験」があったかな？ 例えば、色々な「扉が」—というか、Zoomの「ウィンドウ／窓」が開かれて、お互いが住んでいる場所……それは全然異なっていたり似ていたり、独自の文脈を持った場を訪れることができたよね。

恵子：今年すごく感じたのは、いかにオンライン上のコミュニケーションで、色々なツールを使って自己表現をする事に私たちが慣れてきているか、という事かな。「アハ！」ではないのかもしれないけど、色んな感覚の使い方を普段とは変えて、お互いの「キュー」を受け取れるという事に、感心も驚きもした、という感じ。ある面においては、もうオンラインでコミュニケーションを取る方法を発見しているし、それを進化させていってると思う。

JK：そういう発見とか、これまでオンラインで行われてきた色々なプロセスやパフォーマンスが、どういう風にアーティストが実地で行っている実践とか、その土地とか、コミュニティとか、あるいは環境に影響を与えるのか、私はすごく気になるんだよね。この種が、キャンプの活動の範疇を超えて育て、進化していくためには、どんなサポート体制のインフラ整備をしなくちゃいけないだろう？ この「焚き火」を、どうしたら消さずにいられるだろう？

恵子：自分のコミュニティを象徴するものを見せて、という話をしたときに、参加者の一人が公園の写真を見せてくれたのが面白いと思ったんだよね。私はコミュニティについて考えるときは、同じような状況に置かれた人、ということから考え始める傾向があって、ある場所を共有している人たち、という定義であまりコミュニティのことを考えていなかった。これは、今までは触れられなかった問題を扱える可能性があるかもしれない。というのはつまり、自分が誰であるか（アイデンティティ）ではなくて、オンライン上の空間も含めた、「ある空間に定義されるコミュニティ」という事を考えると、もっとたくさんの人と対話できる可能性があるかも。距離が近くなる、というか。私たちの間の／間にある問題に対する距離が、人を近くすると思う。

JK：私にとっては、最終プレゼンテーションは、どういう風に空間と時間を共有できるか、という事を考え直す場なんだよね。トランスフィールドなコラボレーションの未来って、我々が共存できる空間をどう想像できるか、という事にかかっていると思う。

恵子：そうだね。そのうえで私は、ある地域／の問題を、どういう風にオンライン上のプラットフォームで展開できるか、という事に興味があるな。「一緒に集まっている感覚」というのと、そのうえで「あるコレクティブを作っている感覚」というのが多分あって、こういう感覚で地域をつなぐということを考えてた。それぞれの地域の問題を扱う国際的な、あるいはトランスフィールドな集まりというのがありえるかも、って。常に同じ場所にいる必要って多分なくて。それできたらめっちゃかっこよくない？

JK：いま、色んなアーティストたちが、自分が属するいちばん小さな集団における役割を定義し直すことで、ひいては社会における自らの役割の再定義を試みてるんだと思う。そういう交流や、そうやって集まったりする事が、アーティストにノってどういう価値を持つか、そして、そのアーティストの周りの人々にノってどういう意味を持つのか？ こういうオンラインの集いが、どうやっていずれ現実社会に着地し得るか？ そうする必要はあるのか？ あるいは、別にこのままでも良いのかもしれない。

アートは誰のものか？—たかさんの手形のついた壺のように

恵子：昨日のバルトさんのレクチャー（「ALSO SPACE, ALSO ART — パンデミック下におけるアートのあり方は？」）以来、ずっと「アートに必要な特質というのは何なのか」という事を考えてるんだよね。コミュニティのなかでアートを作るために、いわゆるクオリティの高いアートを作る必要ってあるのか？ そのクオリティは誰が決めるのか？ アーティストの役割について考えていたときに思ったんだけど、今必要なアートの「質」って何なんだろう？

JK：特にこういう「前代未聞」の状況下で、その質を判断するのは誰なのか、というのを問うているのは、なるほどなと思う。新しい尺度というか、量的にも質的にも、アートを評価する新しい方法が必要だと思う。既存の制度の中で定義され得ないような、一般の人が主導したり、一般の人と一緒に作るようなものだったり、非常に個人的なものなだけで、そのアーティスト自身だったり、そのアーティストが属するコミュニティの生活には欠かせない、というようなものに関しては殊更。アートは物事を変質させ得るから重要なのか？ あるいは、様々な可能性を作る／作っただけでコミュニティを再活性化させるような働きをする、という可能性を持つから重要なのか？

アートやパフォーマンスにおける「質」や「完璧さ」という事を考えるうえで、自分が思い浮かべるのは、たくさんの方の指紋や手形のついた、壺とか焼き物みたいなものなんだよね。そういう壺って一目見ただけで、多くの方の手によって、一緒に作られたものなんだという事が分かる。これは、その完成に関わった人たちの全員にとって価値を持っているものだし、たぶん色んな人の役に立つ使い道をみんなで考えたんだろうな、という事も分かる。高い「質」を持ったアートって、そういうものであり得るんじゃないだろうか—協働創作の過程があって、その後日々の生活のなかでも、日常的に機能を持つ、ということ。

かつては、コミュニティアートとか、文化間交流ってこうやるべきだというチェックリストみたいなものがあったけれど、今は、こうしろと教えてくれる教科書は存在しない。パンデミックを通して、今までとは異なるやり方やあり方を経験するなかで、学んでいくしかない。私はキャンプの参加者から、まさにこういった事を学び続けているんだよね。我々は皆、人生という舞台に立っているのだから。

恵子：この「未曾有の」時にあって、私たちにとってノキャンプの参加者たちにとって、アートの必要性って今までになく切迫したものであると思いたい。社会で機能し得るアートを作るためには、常に「アート」は誰のものなのか、という事を問わないといけないと思う。アートを「アーティストの手」から解放し、人々のなかに存在する、もっとダイナミックなものにしないではいけないんじゃないか。私にとっては、今年のキャンプはこういう事を思索する機会だった。

Asian Performing Arts Camp ファシリテーター



JK アニコチェ - バギオ（フィリピン）

マニラを拠点に芸術、文化、社会発展を交差させる活動を行うパフォーマンス作家。活動はブラックボックスでのパフォーマンス創作の開発から様々なコミュニティとの関わりを通じた作品の考案制作まで多岐にわたる。現代文化研究団体であるSipat Lawin Inc. の芸術監督であり、分野にとらわれないパフォーマンス集団、Komunidad X のメンバー。またカルナバル・フェスティバル：パフォーマンスとソーシャル・イノベーションのディレクターを務め、the Virgin Labfest Virtual Edition 2020 や kXchange.org. などにも関わる。近年では、ニューヨーク、台湾、上海でも活動し、日本ではフェスティバル/トーキョー19 で、体験型パフォーマンス『Sand (a)isles』を発表。共同ファシリテーターとしてAPAF2020 Lab に参加。



山口恵子（やまぐち・けいこ） - 京都（日本）

京都在住、俳優。2011年に演劇グループBRDGを立ち上げ、インタビューやフィールドワークを元に、多文化・通訳に焦点を当てた作品を創作。2020年に日本・フィリピンの青少年と、フィリピンの劇団PETAと協同で『ふれる〜ハプロス』を発表、オンライン作品『HELLO』を配信した。俳優として、松本雄吉、マレビトの会、したため、りっかりっか*フェスタ（沖縄）の作品に出演する。2017年アジアセンターフェロー。APAF2020 Lab に参加。2021年より青年団演出部所属。京都・東九条のコミュニティカフェほっこりで店員として働きながらラジオを放送したり、NPO法人スウィングでなんちゃって舞妓をしている。

Photo: Koichiro Kojima

ゲストフィードバック



ヘリー・ミナルティ - ジョグジャカルタ (インドネシア)

インディペンデントのダンス研究者・キュレーターとして理論と実践をつなぐラディカルな戦略を追求。これまでのキュレーション・プロジェクトに、ベッティナ・マーズツフと共同キュレーションした、2004年の第2回アジア・ヨーロッパ・ダンス・フォーラム「ユーラシア：誤ノ解 (Mis/understanding)」のほか、インドネシアン・ダンス・フェスティバル (IDF) など。2020年のTPAM国際舞台芸術ミーティング in 横浜ではディレクターのひとりを務めた。2018年、Jejak-旅Tabi Exchange: Wandering Asian Contemporary Performance を共同創設。ローハンプトン大学 (英) でダンス研究の博士号を取得。2019年にはコレオグラフィの概念をダンスの領域を超えて拡張するための協働リサーチプラットフォーム LINGKARAN | koreografi を立ち上げた。



上田假奈代 - 大阪 (日本)

1969年・吉野生まれ。詩人、大阪市立大学都市研究プラザ研究員、NPO法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム) 代表理事。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ、18歳から京大西部講堂に出入りし、今から思えばアーツマネジメントを学ぶ。「下心プロジェクト」を立ち上げ、ワークショップなどの企画、場作りを開始。2001年「詩業家宣言・ことばを人生の味方に」と活動する。2003年、大阪・新世界で喫茶店のふりをした「ココルーム」を立ち上げる。「釜ヶ崎芸術大学」はヨコハマトリエンナーレ2014に参加。2016年ゲストハウス開設。

Photo: Mai Narita

スタッフ

ファシリテーター：JK アニコチェ、山口恵子
アートトランスレーター：田村かのこ、山田カイル
アートトランスレーターアシスタント：神沢希洋、北川光恵
オンラインテクニカルディレクター：岡本彰生
制作：寺田凜、江口正登

東京芸術祭ファームディレクター：多田淳之介
東京芸術祭ファーム共同ディレクター：長島確

コミュニケーションデザインチーム (Art Translators Collective) :
チーフ 田村かのこ
メンバー 山田カイル、春川ゆうき、森本優芽、水野響、縦山智子

APAF制作オフィス：植松侑子、谷陽歩、水戸亜祐美、古川真央、寺田凜、前原拓也、江口正登 (合同会社syuz'gen)

APAF事務担当：石戸谷聡子 (東京芸術祭)

助成：国際交流基金アジアセンター アジア・市民交流助成

東京芸術祭 2021 Tokyo Festival 2021

会期 2021年(令和3)9月1日(水)～11月30日(火)
会場 東京芸術劇場、GLOBAL RING THEATRE(池袋西口公園野外劇場)、あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)、東京建物 Brillia HALL(豊島区立芸術文化劇場)ほか東京・池袋エリア
主催 東京芸術祭実行委員会〔豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、公益財団法人東京都歴史文化財団(東京芸術劇場・アーツカウンシル東京)〕
 令和3年度 文化庁 国際文化芸術発信拠点形成事業

助成
プランニングチーム
 総合ディレクター 宮城 聡
 副総合ディレクター 長島 確
 共同ディレクター 河合千佳、多田淳之介、内藤美奈子
 豊島区事業ディレクター 酒井 快、師岡斐子
 リサーチディレクター 横山 義志

東京芸術祭実行委員会
顧問
 野村 萬 (公社)日本芸能実演家団体協議会会長、能楽師
 高野之夫 豊島区長
 福地茂雄 (公財)新国立劇場運営財団 顧問、(公社)企業メセナ協議会 顧問、アサヒグループホールディングス株式会社 社友
委員長 近藤誠一 元文化庁長官
副委員長 三好勝則 (公財)東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京機構長
 小池章一 豊島区文化商工部長
委員 尾崎元規 (公社)企業メセナ協議会 理事長
 荻田 伍 東京芸術劇場 館長
 小澤弘一 (公財)としま未来文化財団 事務局長
 熊倉純子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授
 永井多恵子 (公社)国際演劇協会 会長
 中田雅史 アサヒグループホールディングス株式会社
 日本統括本部 事業企画部 理事
 七海友信 日本放送協会制作局<第5制作ユニット>音楽・芸能チーフディレクター
 蜂谷典子 東京都生活文化局文化振興部長
 渡邊裕之 東京商工会議所豊島支部 会長
監事 山内真理 公認会計士山内真理事務所

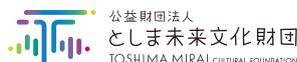
東京芸術祭実行委員会事務局
事務局長 高萩 宏
事務局次長 小澤弘一、樋口 桂、小倉 桂
事務局次長代理 高橋孝志
アソシエイト・ディレクター 根本晴美
事務局長補佐 杉谷正則、立石和浩
シニアコーディネーター フザキ浩実
庶務担当 村岡安太
管理 室内直美
 葦原円花、中山恭一(NPO法人アートネットワーク・ジャパン)
経理 谷田信生、石鍋由紀子(アスタービジョン株式会社)
事務担当(劇場調整) 半澤裕彦
渉外 米原晶子(NPO法人アートネットワーク・ジャパン)
広報 小倉明紀子、岡野乃里子、名取萌音、植田あす美(NPO法人アートネットワーク・ジャパン) 冠那菜奈
 小仲やすえ(株式会社precog)、船寄洋之
SNS運営 瀧美貴史、野田千尋、佐野圭介、中坂優一(ツナガル株式会社)
票券担当 穴戸 円
 武井和美(NPO法人アートネットワーク・ジャパン)
APAF事務担当 石戸谷聡子
豊島区事務調整担当 柳下 弥
としま国際アート・カルチャー 小笠原愛、山田望
都市発信プログラム事業担当
芸術オータムセレクション事務担当 吉田直美
アートディレクション 村上雅士(emuni)
ウェブサイト設計・デザイン 北尾一真、伊藤友美、伊藤澤奈子(株式会社ロフトワーク)
 田中隼人、K28
翻訳 オフィス宮崎
 Art Translators Collective
法務アドバイザー 福井健策、北澤尚登、岡本健太郎(骨董通り法律事務所)

Festival dates Wednesday, September 1 - Tuesday, November 30, 2021
Sites Tokyo Metropolitan Theatre, GLOBAL RING THEATRE, OWLSPOOT Theatre, TOKYO TATEMONO Brillia HALL and others
Organizer Tokyo Festival Executive Committee
 [Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture (Tokyo Metropolitan Theatre & Arts Council Tokyo)]

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2021
Planning Team
 General Director Satoshi Miyagi
 Vice General Director Kaku Nagashima
 Co-Director Chika Kawai, Junnosuke Tada, Minako Naito
 Toshima City Program Director Kai Sakai, Ayako Morooka
 Chief Dramaturge & Programmer Yoshiji Yokoyama

Tokyo Festival Executive Committee
Advisor
 Man Nomura Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor
 Yukio Takano Mayor of Toshima City
 Shigeo Fukuchi Advisor, New National Theatre Foundation;
 Advisor, Association for Corporate Support of the Arts, Senior Alumni, Asahi Group Holdings, Ltd.
 Former Commissioner, Agency of Cultural Affairs, Japan
Chair of Executive Committee Seichi Kondo
Vice Chair of Executive Committee Katsunori Miyoshi
 Director General, Arts Council Tokyo,
 Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
 Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City
 President, Association for Corporate Support of the Arts
 Director, Tokyo Metropolitan Theatre
 Koichi Ozawa Administrative Director, Toshima Mirai Cultural Foundation
 Professor, Graduate School of Global Arts,
 Tokyo University of the Arts
 Taeko Nagai Chair, Japanese Centre of International Theatre Institute
 Masashi Nakata Senior Officer, Business Planning Department,
 Japan Headquarters, ASAHI GROUP HOLDINGS, LTD.
 Principal Program Director, Unit 5 Arts & Entertainment
 Program Production Department,
 Japan Broadcasting Corporation
 Noriko Hachiya Senior Director, Culture Promotion Division,
 Bureau of Citizens and Cultural Affairs,
 Tokyo Metropolitan Government
 Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima
 Representative, Yamauchi Accounting Office

Tokyo Festival Executive Committee Office
Secretary General Hiroshi Takahagi
Deputy Secretary General Kouichi Ozawa, Kei Higuchi, Kei Ogura
Vice Deputy Secretary General Takashi Takahashi
Associate Director Harumi Nemoto
Assistant Secretary General Masanori Sugitani, Kazuhiro Tateishi
Senior Coordinator Hiromi Ozaki
Office Manager Kouta Muraoka
Administrator Naomi Murouchi
 Madoka Ashihara, Kyoichi Nakayama (NPO Arts Network Japan)
Staff Accountant Nobuo Tanida, Yukiko Ishinabe (Aster Vision Japan, Inc)
Administrator (venue coordination) Hirohiko Hanzawa
Liaison Officer Akiko Yonehara (NPO Arts Network Japan)
Public Relations Akiko Ogura, Noriko Okano, Mone Natori, Asumi Ueda (NPO Arts Network Japan), Nanana Kanmuri Yasue Konaka (precog co., LTD.), Hiroyuki Funayose Tadashi Atsumi, Chihiro Noda, Keisuke Sano, Yuichi Nakasaka (Tsunagaru Inc.)
Social Media Management
 Tsubura Shishido, Kazumi Takei (NPO Arts Network Japan)
Ticket Administration Manager (APAF) Satoko Ishitoya
 Manager (Toshima City) Wataru Yagishita
 Manager (Toshima Mirai Cultural Foundation) Ai Ogasahara, Nozomi Yamada
 Manager (Tokyo Metropolitan Theatre) Naomi Yoshida
Art Direction Masashi Murakami (emuni)
Web Design Kazuma Kitao, Tomomi Ito, Minako Ito (Loftwork Inc.)
 Hayato Tanaka, K28
Translation Office Miyazaki, Inc.
 Art Translators Collective
Legal Advisors Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa, Kentaro Okamoto (Kotto Dori Law Office)



発行：東京芸術祭実行委員会 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
 九段ファーストプレイス8F アーツカウンシル東京内 東京芸術祭実行委員会事務局
 TEL:050-1746-0996 (Mon-Fri 10:00-18:00) <https://tokyo-festival.jp/2021/>
 ※開催期間は会場・公演により異なります。※開催情報は予告なく変更になる場合があります。
 ※最新情報はウェブサイトをご確認ください。

本プログラムのアンケートにご協力をお願いいたします。

アンケートフォームはこちら

In order to help us understand our audience's needs better, we kindly ask for your cooperation in filling out this audience questionnaire.

日本語 | English